

旅

雁

著 者 略 歴

大正2年 盛岡市清水町の現住地に生る
本名（耕一）
大正14年 県立盛岡中学校入学
昭和4年 病気のため同校中退
昭和12年 盛岡魚市場入社
昭和20年 岩手県水産物配給機構業務課長
昭和25年 中央水産株式会社取締役
昭和45年 中央食品工業株式会社社長

中 野 千 里 詩 集「旅 雁」

昭和54年10月6日 発行 定価 3,000円 送料 200円

著 者 中 野 千 里
盛岡市清水町3番7号
印 刷 (株) 熊 谷 印 刷
盛岡市上田1丁目6番49号
発行者 中 野 千 里
盛岡市清水町3番7号
電話 (0196) 22-3706

中野千里詩集

旅りよ

雁がん

千里

序

自分は 生来 “烟霞の痼疾” があつて 世事に疎く 春雁に
はその去るを愛惜し 秋雁 にはその来るを待つて 夕陽沈まむ
とする頃 空を仰いで あくことを知らない といふようなこと
である

一体 自分とは何なのであらうか と疑問の原点に 再びたち
かへるようなこともある

ここに収録した詩は 数十篇に過ぎないが 一人の人間が その青春の時代から 老に到る 数十年の間に 何に感動し 何に歎び 何に涙して生きて来たか その証^{あか}しの記録である とでも言つたら いいのだらうか

詩集の内容「旅雁」「秋風来」はこゝ数年間の最も新らしいものであり

南昌山 昭和三十年—五十年

むかしの歌 昭和二十年—四十年

戦さ終りて 昭和二十年—二十五年

俳句

八十句 昭和十年前後

章を追うて 年代は遡り 年齢の若い頃のものとなる

或る人は謂うには「詩（現代詩）とは胡乱うらんなものだと 世人に思はれてきた」と 日本の近代詩が その系譜を 西欧の詩の系譜に列せしめたことが あやまちでは無かつたか

日本には 古くより和歌があり また 漢詩の貴重な経験を経て 俳句に永い年月 親しんで 来てゐる

或る日 突然 発想の異なる 異質の文藝を持ち込んで その模倣としか思へない作品を造り出したとしたなら 顧みる人も少く

胡乱なものとして待遇されるのは当然のことであらう

日本の近代詩は　やはり　その入口を誤つたのではなからうか
その国の土壤に根ざしたもので無ければ　人々の心をとらへ
感動と　共感を得ることが出来ないのではないか

明治以来　詩人と謂はれ　詩人と稱してゐる多くの人がゐるけれども　吾々に眞に感動を與へ　そして　たしかに価値づけられてゐる作品は　その尊敬すべき少数の　眞の意味の詩人と共に極めて少い

現代の詩は　どういふものであつたらうのだらうか

その“内なるもの”も　また“スタイル”も含めて　考へるべき時であると思ふ

自然をこよなく愛し　自然と共に生き　花鳥　風月に　その感懐を托して来た　われ／＼日本人と　その厳しい自然と対立し　山を魔の居る処と感じ　そして登攀することを　山を征服することゝ感じた西欧人とは　自ら異つた心の状態であるに違ひない

大正から昭和初期にかけての　あの澎湃ほうはいとした文藝復興の氣運は　何処へ行つたのであらうか　こゝ十年　二十年　詩歌の沈滞　荒廃は　目を覆ふばかりである

感銘に価する新らしい作品には 容易に接することが出来ない
時代となつた

文藝復興期はもう去つたのであらうか 或ひは これにも周期
があるのかも知れない

波動のやうなものがあつて 今はその波の高まりから 次で低
い処に來た時点なのかも知れない と すると いづれ再び「詩
歌（俳句も含めて）の復権の時」が訪づれてくるのかも知れない
詩歌は 人間の心の地下水である 湧水である 日本人の心に
心の湧き水がいつまでも清らかに 湧きつゞけてゐるやう 祈ら
ずにはゐられない

東北地方に 秋雁の渡来するのは 九月二十日頃から 十月初旬に最も多く見られる 北上川を眼下に南下する

盛岡の上空を通過するのは 午后四時十五分頃から四時三十分頃が多い これは 陸前 伊豆沼へ着くのが 日没前後と いふことなのだらうかと思ふ

伊豆沼は 東北本線新田駅に近く 上り列車では 右手の車窓に見ることが出来る 日本全土に渡来する「真雁」の中三〇％―四〇％は この伊豆沼に渡来するといふ また 此処を中継地として更に南下するものも多いのであらう

序詩

吾れ若き日に

吾れ若かりし日に

詩人^{うたびと}を志し

拙^{つた}なき詩を誌^しるたり

世は啻^{ただ}ならず

自ら筆^なを擲^なげうちて

再びは ペンとることなかりしも

戦^{いく}さ 破^やれて

わが 心

また傷^{きず}つきて癒^いゆるなき

齡^{よはひ} 五十^{いそ}路^ちを過^すぎし今日

固^{かた}くとざせし むらぎもの

また 詩^{うた}おもふ このごろぞ

旅 雁 目次

序 詩 10

旅 雁

旅 雁 20

梁 楷 雪景山水図 24

榮 萁 28

伊勢路 30

椰木の径 32

西崎 緑 讃歌 34

小樽.....38

朝里川に近く.....42

雁来るを.....44

宗達 芦鷺図.....46

鮎解禁.....48

かぶりもの.....52

秋風来

秋風の賦.....60

人生齡六十.....62

山女魚.....64

南昌山

南昌の山の邊りに……	70
さはれ……	72
養心一瀾水……	75
春なほ遠し……	78
南昌山……	80
ひとはひと……	83
南昌山も見えずなりけり……	84
下の橋中学の教室の窓に……	88